

平成 22 年 5 月 18 日現在

研究種目：基盤研究 (B)
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19320049
 研究課題名 (和文) 欧州・朝鮮・南洋航路を中心とする戦間期日本における旅行記の比較文化的研究
 研究課題名 (英文) Japanese Interwar Travel Writing and Ocean Liners: Passage to Europe, Korea and the South Sea
 研究代表者
 橋本 順光 (HASHIMOTO YORIMITSU)
 大阪大学・大学院文学研究科・准教授
 研究者番号：80334613

研究成果の概要 (和文)：

座標軸として和辻哲郎の『風土』(1935)を旅行記として注目することで、漫遊記を多く生み出した欧州航路、旅行者と移民の双方を運んだ南洋航路、そして主に労働者を「内地」へ供給した朝鮮航路と、性格の異なる三つの航路の記録を対比し、戦間期日本の心象地図の一側面を明らかにすることができた。和辻の『風土』が展開した文明論は、戦間期の旅行記という文脈に置くことで、心象地図という抽象化と類型化に大きく棹さした可能性が明らかになった。

研究成果の概要 (英文)：

A number of Japanese travelogues were published during the 1920s and the 1930s. They were closely related to the growing popularity of cruises, particularly the NYK (Nippon Yuken Kaisha) line sailing between Yokohama and London. Watsuji's well-known *Fudo* (*Climate and Culture*, 1935) was also largely based on his travel to Europe in 1927. Its environmental determinism, however oversimplified, articulated and endorsed the mental map of the Japanese interwar tourists to Europe, Korea and the South Sea. Watsuji's *Fudo* is critiqued as a discursive take on the Japanese mental map of the politicised world during this critical period of the 20th century.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	3,100,000	930,000	4,030,000
2008年度	2,500,000	750,000	3,250,000
2009年度	2,100,000	630,000	2,730,000
年度			
年度			
総計	7,700,000	2,310,000	10,010,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：各国文学・文学論

キーワード：比較文学、ツーリズム、和辻哲郎、『風土』、日本郵船、欧州航路、朝鮮航路、南洋航路

1. 研究開始当初の背景

近代日本人の異文化体験については、これ

まで多くの研究成果が積み重ねられてきたが、航路に注目した旅行記研究はいまだ十分ではない。一方、交通史研究やツーリス

ム研究では、航路や旅行をめぐるインフラストラクチャーの整備について多様な成果が蓄積されている。しかし、それを異文化体験の基盤や土台として、とりわけ船旅が一般化した1920年代から30年代という戦間期の旅行記研究に援用することは、まだまだ手つかずの状態といつてよいだろう。

2. 研究の目的

そこで本研究は、戦間期に旅行記という文明論を生み出した基盤として、欧州航路、朝鮮航路、南洋航路の三つに注目した。

これら三つの航路によって、戦間期の船客たちはどのような心象地図を形成するようになったのか。旅行記と世界観が密接に関連していた代表例として和辻哲郎の『風土』をとりあげ、関連する旅行記と旅行案内を発掘しながら、戦間期における心象地図と形成過程の解明を試みた。

3. 研究の方法

和辻の記述にもとづきながら、航路と寄港地に関して旅行記と旅行案内を発掘し、整理を行った。日本郵船については、日本郵船歴史博物館の協力の下、多くの貴重な一次資料を調査した。それらの成果と当該地域での現地調査および文献調査とを組み合わせることで、こうした戦間期の船旅においては、何が見出され、何が見落とされるのか、制度や構造面に注目して分析した。このように、ツーリズム研究と地域研究の方法を積極的に応用するよう心がけた。

それらの航路と寄港地については、専門ないし専門に近い地域の研究者に分担を依頼し、分析の共有と統合を行った。具体的には朝鮮航路を李建志、南洋航路を須藤直人、欧州航路では、横浜を鈴木禎宏、シンガポールを西原大輔、ペナンを大東和重、コロomboを橋本順光、ポート・サイドを山中由里子、マルセイユを、研究協力者である児島由理、ロンドンを橋本が担当した。

4. 研究成果

(1) 欧州航路の比較文学 旅行記としての『風土』(橋本)

出発点として、戦間期に日本郵船の欧州航路が一般化した文化史的意義を確認した。ノルマントン号事件の10年後である1896年に開設された欧州航路は、1920年に高級船員が全員日本人となり、同時記のパスポート制度確立と加入にともなって、日本の国際的自立と自尊を象徴する存在となってゆく。

したがって、香港、シンガポール、ペナン、コロombo、ポート・サイド、マルセイユと

多くの英領植民地を経由するその船旅は、それ自体が特記すべき異文化体験となった。欧州航路の一般化に伴い、詳細に旅程を記した旅行記が膨大に出版されたが、それは当時の文明論の流行と軌を一にしている。

和辻の『風土』もまた、中国、インド、中東、ヨーロッパと、日本郵船の欧州航路に沿って記されている点で、旅行記＝文明論という流行の一例となっており、それは原型となった1927年の洋行中に妻に宛てた書簡からも確認できる。もっとも和辻は、先行する旅行記群とは距離をおき、帰国からおよそ7年後という冷却期間において『風土』を刊行している。しかし、それは断絶というよりむしろ、先行する紀行文が断片的に積み上げてきた文明論を図式化ないし簡略化した見取り図となっており、それゆえに戦間期の心象地図として影響力をもったと考えられるだろう。

(2) 欧州航路 横浜(鈴木)

欧州航路を利用した近代の日本人旅行者および日本を訪れた外国人旅行者にとって、出発や到着の感慨を強める契機となるのは横浜ではなく、むしろ富士山であった。横浜は欧州航路の起点かつ終点であり、重要な拠点であることに疑いはない。しかし、和辻ほか近代の日本人旅行者の文学を見る限り、横浜への言及は総じて少なく、特に帰国者が横浜到着に言及することは希である。むしろ、日本人が世界と自分を位置づける際に拠り所としたのは、海上から見上げた富士山であった。さらに、海外から日本を訪れる外国人旅行者からみた場合も、Mt. Fujiは日本へ来た事の証であった。こうした日本側と外国側との富士山像はすれ違いつつ絡まりあい、日本人が抱く世界観の中で富士山は特異なランドマークとして、繰り返し表象された。

(3) 欧州航路 シンガポール(西原)

総じて日本とシンガポールとのかかわりは、次の4面に分けて考えることができる。1 日本人海外醜業婦のシンガポール出稼ぎ、2 洋行途上の文化人の寄港、3 第二次世界大戦下の昭南島支配、4 戦後日本における観光地としてのシンガポール。

和辻は典型的な2にあたる。これら寄港者のあいだでは共通する体験が極めて多く、その記述もある意味で類型的たらざるをえない。しかし、日本から欧州に向かう途上でシンガポールに立ち寄った旅行者が、熱帯の風物にばかり関心を持っていたのに対し、欧州から日本へと帰る旅行者は、イギリス人の東洋支配の拠点としてのシンガポールという意識が強く出ている。シンガポールという同一の場所に足を踏み入れながら、西航者と東航者で記述が大きく異なっていることが、本

研究を通じて明らかになった。

(4) 欧州航路 ペナン (大東)

和辻のペナン滞在は、往路だとわずかに六時間も満たない。しかし、当地での経験が、和辻に風土論の構想の雛型を提供した可能性が明らかになった。ペナン・ヒルに向けたケーブルカーにて、常夏という「時間的な移り行き」を欠いていた南洋には、上昇につれて温度が低くなる、つまり「空間的な移り行き」が存在していることに、和辻は驚愕し、空間哲学ともいべき風土論を展開するからである。

一方で、和辻の記述には、当時の南洋への紀行文との共通点も多い。マレー人・タミル人・華人が集住する大英帝国の植民都市ペナンを、日本人がどのように描いたのか、他の紀行文や、歴史的背景、そこに住んでいた人々の記録と照らし合わせることで、和辻、そして寄港の短い滞在中に日本人たちの見た、あるいは(見えていたはずなのに)見えなかったペナン及びマレー半島についても対比を行った。

(5) 欧州航路 コロンボ (橋本)

コロンボへの途上で和辻は、甲板で寝泊まりしながら、家族でインド洋を往復するデッキパセジャーと呼ばれる人々を目にする。インドを訪問しなかった和辻が、『風土』においてインドの「忍従的」性格を引き出したのは、もっぱら彼らの姿からであった。コロンボには滞在したものの、散策することはほとんどなく、そのインド像は、デッキパセジャーの印象を文献と結び合わせて形成されたことを指摘した。

和辻は、おそらく30年代に盛んに刊行されたインド論を念頭においてのことだろう、そのインドの「忍従」性ゆえ、訪問者はインド独立の欲望を衝動的に喚起されてしまうと記した。しかし、こと同時代のコロンボの訪問記については、そうした指摘はあてはまらない。そこでは、日本人相手に巧みな日本語を操る宝石商ハシム商会が登場することが多く、和辻の記録とは好対照をなしている。

そこで、旅行記などの記録からハシム商会の足跡をたどり、コロンボ在住の遺族に聞き取りを行った。その際に、ハシムが二代にわたって反英運動を支持しており、それを英国政府が警戒していたこと、またハシムの息子が日本に訪問したほか、日本側の取材記事が存在したことが判明した。

(6) 欧州航路 ポート・サイド (山中)

和辻のアデン、ポート・サイドの記述は同時代の典型的な旅行記であることを確認する一方で、和辻の目に入らなかった南部商会の記録を発掘した。南部は、ポート・サイ

ードで旅行手配業を営んだ雑貨商であり、在仏の遺族への聞き取りと遺品をもとに、その知られざる足跡を明らかにした。戦間期のポート・サイドで主に日本人を相手に、船舶雑貨商と観光案内手配業で財をなした南部憲一は、遺族によれば1937年に日本に引きあげたという。その後、第二次世界大戦勃発で店を没収されるまで、経営は弟の慶三が行ったということであり、戦争直前までの南部商会の動きが始めて明らかになった。

(7) 欧州航路 マルセイユ (児島)

初めて踏むヨーロッパの地であったマルセイユについては、研究協力者である児島由理が幕末から昭和初期までのマルセイユ経由でヨーロッパを訪れた日本人の旅行記を博捜し、和辻はそれらの型を反復しつつも、最初から自然の違いに注目していることを特徴に挙げた。

次にベルリン滞在中をへて、二度目のマルセイユの「つまらなさ」と面白さが歴然としていることに興味を覚えた和辻は、外国人の多さとその風土について書きとめている。事実、『風土』においてヨーロッパの「牧場」的風土として挙げられる事例の多くは、この二度目のマルセイユにおいて書簡で言及している地中海沿岸のものであることが、明らかになった。

(8) 欧州航路 ロンドン (橋本)

和辻のロンドンについての記述は、主に博物館が中心となっているが、これは同時代の旅行記と多く共通する。とりわけ大英博物館について、当時の多くの旅行者同様に、和辻は盗品の多さに感嘆している。博物館以外では、わずかに劇場に言及があるが、『新思潮』に参加していたころに訳したショーの新作には何ら言及がなく、観劇したのはわずかにチェーホフのみである。これは、ロンドンが博物館の街でしかなく、先端文化の発信地としてみなされなくなった同時代の記述と通底しており、英国が博物館的存在へと衰退していったこととも関連づけられる。欧州航路において、寄港地のほとんどが英国領であるにもかかわらず、「上京」した帝都ロンドンの失速ぶりを目にした旅行者は、広大な植民地を支配する大英帝国の象徴として、世界中の植民地から美術品を収集し展示する大英博物館に対して批判する傾向があった。そして、そうした大英帝国批判は、東西文明の対立と対話という当時流行していた文明論へと援用されることにもなった。

(9) 朝鮮航路 (李)

『風土』において和辻は朝鮮にほとんど触れていないが、その欠落は、朝鮮航路の重要性と政治性となんら矛盾するものではない。

それは19世紀末から20世紀半ばまでの朝鮮航路の歴史を総覧することからも明らかであり、最初期朝鮮航路から、1905年9月に始まる下関～釜山間のいわゆる関釜連絡船草創期、続く1920年代から1930年代にかけての関釜連絡船成熟期、1940年代の関釜連絡船終焉期と、分類することで、その変遷が政治と不可分であったことが確認された。

関連して、1927年に欧州航路を旅した李王垠の記録を発掘し、その足跡を明らかにした。それは同時代の、とりわけ皇族の洋行とほぼ同じ旅程をなぞっている一方で、皇族ではなく李王としての存在を際立たせることにもなったことが指摘された。

(10) 南洋航路 (須藤)

1930年代から40年代初めの、当時日本の統治下に置かれていた南洋群島ミクロネシアを訪れた日本人作家達の旅行記や小説について、以下の点を調査し、明らかにした。1 記述内容・形式のパターンはどうか。航路の途上で見たものや船内・現地で出会った人々(日本人移民・旅行者)などの、何がどのような影響を与えたか/与えなかったか。2 既存の文学や大衆文化の中の「南洋」「南島」のイメージ、南進論がどのように影響しているか。既成のイメージやイデオロギーに対してどのように抵抗しているか。3 現地民の視点や現地の文化をどのように捉えているか。それらによりどのような影響を受けているか。

また、日本統治の中心地であったパラオの伝統的建築物(パイ)と彫刻絵(イタボリ)に注目した。これらが、外部との接触・植民地支配を通して文化的アイコン・観光のシンボルとして成立・変容し、再発見され、さらには、現地側で応用されてきた様相を、南洋航路が果たした役割に焦点を当てて明らかにした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計28件)

- ① 橋本順光、欧州航路の比較文学 旅行記としての和辻の『風土』、欧州・朝鮮・南洋航路を中心とする戦間期日本における旅行記の比較文化的研究報告書、査読無、印刷中、2010
- ② 鈴木禎宏、富士山と Fujiyama - 表象の可能性とランドマーク機能、欧州・朝鮮・南洋航路を中心とする戦間期日本における旅行記の比較文化的研究報告書、査読無、印刷中、2010

- ③ 西原大輔、和辻哲郎の『風土』とシンガポール体験、欧州・朝鮮・南洋航路を中心とする戦間期日本における旅行記の比較文化的研究報告書、査読無、印刷中、2010
- ④ 大東和重、日本人の見たペナンー大正から戦時中まで、欧州・朝鮮・南洋航路を中心とする戦間期日本における旅行記の比較文化的研究報告書、査読無、印刷中、2010
- ⑤ 橋本順光、コロンボの宝石商ハシム、欧州・朝鮮・南洋航路を中心とする戦間期日本における旅行記の比較文化的研究報告書、査読無、印刷中、2010
- ⑥ 山中由里子、スエズの商人—南部憲一、欧州・朝鮮・南洋航路を中心とする戦間期日本における旅行記の比較文化的研究報告書、査読無、印刷中、2010
- ⑦ 児島由理、近代日本人の描いたマルセイユ、欧州・朝鮮・南洋航路を中心とする戦間期日本における旅行記の比較文化的研究報告書、査読無、印刷中、2010
- ⑧ 須藤直人、南洋表象と南洋航路—帝国ネットワークが結ぶ南洋群島、欧州・朝鮮・南洋航路を中心とする戦間期日本における旅行記の比較文化的研究報告書、査読無、印刷中、2010
- ⑨ 李建志、朝鮮航路と朝鮮、欧州・朝鮮・南洋航路を中心とする戦間期日本における旅行記の比較文化的研究報告書、査読無、印刷中、2010
- ⑩ 李建志、李垠の外遊—欧州航路を渡った植民地の王族、欧州・朝鮮・南洋航路を中心とする戦間期日本における旅行記の比較文化的研究報告書、査読無、印刷中、2010
- ⑪ 大東和重、旅居台南時期的國分直一(中文)、第二屆南瀛研究國際學術研討會論文稿、査読無、2号、2008、238-254
- ⑫ 児島由理、高浜虚子と横光利一の船旅—『渡仏日記』と『欧洲紀行』—、実践女子短期大学紀要、査読無、30号、2009、69-82

- ⑬ 西原大輔、四たび来星した島崎藤村、シンガポール、査読無、249号、2009、15-18
- ⑭ 児島由理、近代日本人の見たマルセイユー「初めて踏み欧羅巴の土」に抱いた印象一、実践女子短期大学紀要、査読無、29号、2008、137-155
- ⑮ 橋本順光、没後50年記念フランク・ブラングイン展の余白に一野口米次郎とコバーンとの交流をめぐって一、ジャポニスム研究、査読無、27号、2007、92-9
- ⑯ 須藤直人、中島敦の混血表象と南洋群島：ポストコロナル異人種間恋愛譚、立命館言語文化研究、査読無、20巻1号、2008、49-63
- ⑰ 西原大輔、洋画家荻須高德の見た昭南島、シンガポール、査読無、239号、2007、26-29

[学会発表] (計10件)

- ① 橋本順光、戦間期旅行記にみるコロンボとロンドン 桜井忠温と和辻哲郎を中心に、日本比較文学会関西支部例会、2009年7月18日、近畿大学
- ② 橋本順光、天竺への道 暁鳥敏を中心とする仏跡巡礼とアジア主義の相互関係、日本比較文学会第45回関西大会シンポジウム、2009年10月31日、立命館大学
- ③ 西原大輔、西に行く日本人の見たシンガポール、東に帰る日本人の見たシンガポール、日本比較文学会第45回関西大会シンポジウム、2009年10月31日、立命館大学
- ④ 大東和重、彼南・Penang・檳城 - 日本人の目に映った／映らなかったペナン、日本比較文学会第45回関西大会シンポジウム、2009年10月31日、立命館大学
- ⑤ 須藤直人、椰子の木と章魚の木：南洋群島ミクロネシア往還の果て、日本比較文学会第45回関西大会シンポジウム、2009年10月31日、立命館大学
- ⑥ 須藤直人、パラオ観光文化と南洋航路／ポストコロナル表象、日本比較文学会関西支部例会、2009年9月19日、大手前大学

[図書] (計1件)

- ① 橋本順光、「チン・チン・チャイナマン」の歌と近代日本—夏目漱石から箕作秋吉まで、横浜国立大学留学生センター編『国際日本学入門』、2009、56-73

6. 研究組織

(1) 研究代表者

橋本 順光 (HASHIMOTO YORIMITSU)
大阪大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：80334613

(2) 研究分担者

山中 由里子 (YAMANAKA YURIKO)
国立民族学博物館・民族文化研究部・准教授
研究者番号：20251390

(3) 研究分担者

西原 大輔 (NISHIHARA DAISUKE)
広島大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号：70286110

(4) 研究分担者

須藤 直人 (SUDO NAOTO)
立命館大学・文学部・准教授
研究者番号：60411138

(5) 研究分担者

李 建志 (LEE KENJI)
県立広島大学・人間文化学部・准教授
研究者番号：70329978

(6) 研究分担者

鈴木 禎宏 (SUZUKI SADAHIRO)
お茶の水女子大学・大学院人間文化創生科学研究科・准教授
研究者番号：80334564

(7) 研究分担者

大東 和重 (OHIGASHI KAZUSHIGE)
近畿大学・語学教育部・講師
研究者番号：60434859

(8) 研究協力者

児島 由理 (KOJIMA YURI)